



# OM-2 一方向

【伊丹—東京】新作公演 真壁茂夫 × 日本人俳優

(前略)果たしてこの現実を演劇、とりわけセリフによる芝居で掬いとれるだろうか。わたしたちが見ているのは、フィクションによって再構成される手前の生々しい現実であり、それを感受する身体そのものに他ならない。(後略)

【OM-2のショック】演劇評論家・近畿大学教授 西堂行人

OM-2の舞台は、物語りに寄り掛かることを決してしない。その代わり、ダンス、映像、美術、文学としての言語等、多様なジャンルを混合・攪拌してステージの上に投げ込んでくる。いわば狂気の時間創造。(後略)

ジャズ評論家 副島輝人

(前略)OM-2の舞台で我々が目の当たりにするのはパフォーマー自身の生身の姿である。彼らは他の何者かを演じるわけではない。彼らが表現しようとしているのはできるだけ純粹なかたちで抽出された「私」そのものの姿だ。(後略)

「生身の己を引きずり出すためのラディカルな問いかけ」批評家・早稲田大学非常勤講師 片山幹生

